

## 論文

# 学習者のための英語の時間とその形式

新 川 清 治

Time and Tense in English for Students

SHINKAWA Seiji

### 目次

0. はじめに
1. 動作動詞と状態動詞
2. 進行形は動作動詞の状態形
3. “i'm lovin' it”
4. 英語の時間とその形式
5. 現在完了形は現在形の一種
6. おわりに

## 0. はじめに

時制、関係詞と言えば、英語学習者が苦手とする文法事項の代表のように言われる。特に前者は質が悪い。一般に日常会話ではそもそも関係詞が用いられること自体が少ないし、避けるのも容易であるが、動詞のない文は普通考えられない。省略して文の一部のみを提示するようなことも多いが、まとまった内容を伝えるためにはやはり述語動詞が必要であろう。基本的に一文に一つは動詞が入っていると考えた方がいい。そしてその動詞には一々時制を考えなければいけないのである。

次の二文を考えてもらいたい。

彼が部屋に入ると、もう誰もいなかった（みんな部屋を出てしまっていた）。

彼が部屋に入ると、みんな出て行った。

意味が大きく異なるが、英文ではこの違いが「出て行く」(go out) という動詞の時制の違いのみで示され得る。「彼女を見た時、別の方を向いていた。」と「彼女を見たら、そっぽを向かれた。」も同様である。時制一つで大きな誤解を招く恐れもある訳である。このように時制は円滑なコミュニケーションに直接かかわる問題であり、日常会話のレベルでもその理解が不可欠なのである。

ここで時制の理解と言っても、それは学問的意味におけるものではない。時間の概念がいかに言語形式において示されているかというのは通時的にも共時的にも興味を引く問題であり、そうした研究が英語学習者に対して深い洞察を与えることもあり得ると思われるが、それは上級者に対してのみ当てはまることであろう。一般には、例えば時制と相を区別しても、ただ混乱を招くだけであるように思われる。ここで問題とするのは学習上の理解であり、そのためには出来るだけ単純な説明がいい。色々な問題を抱

えながらも五文型が有効なのは、それが様々な文の形式をたった五つに分類してしまっているからで、もしこれが三十五文型であれば、例えそれがすべてを網羅する全く正確な分類であったとしても、パターンの多さ自体で学習者、特に初学者に対しては全く用をなさないであろう。正確な記述はさて置き、英語の時間とそれを表す形式を学習者の理解しやすい形に整理し、提示することが本稿の目的である。

その分かりやすさの基準であるが、筆者個人の英語教員としての経験に基づかざるを得ない。これまで時制を教えてきて、学生・生徒の理解を助けたと思われる、簡単に言うと、受けの良かった説明を中心に論を進めることになる。またここで書かれていることは、筆者が学習者として、指導者として、あるいは研究者として学んできた文法書や、先生、同僚、学生などとの文法談義が核となっていることに間違いないが、それを筆者なりに咀嚼して発展させたものであり、特にどの一つに負っているというものではない。古英語やゴート語など古いゲルマン語の研究を通して得た歴史的視点からの着想も多いので、特にこれが出典と言えない場合が多い。筆者の考えを明瞭に提示するためにも、出典と思しきものを一々示すことはしないことにする。

## 1. 動作動詞と状態動詞

時制の議論に入る前に、動作動詞と状態動詞を区別する必要がある。前者は意志で制御できる動作を示し、後者は知覚・感情・関係などの状態を示す。動作動詞は直感的に理解しやすいようで、この説明だけで十分であるように思われるが、問題は状態動詞である。例を示し、説明を重ねても効果が薄い場合が多い。感覚的な理解のために論理的説明はあまり役立たないのであろう。そこで“I have a pen.”という極めて初歩的な英文を学生に訳させてみる。ほぼ例外なく「私はペンを持っている。」と訳すであろう。なぜ進行形でもないのに「ている」と訳すのか。「持つ」とする

と「つかむ」という動作の意味になり、「所有している」、「手の中にある」という状態の意味にならないから、自然とそうするのであろう。既に状態動詞を何となく理解している訳である。進行形でもないのに思わず「ている」と訳してしまう動詞、それが状態動詞なのである。

それではhaveは状態動詞なのかと言うと、必ずしもそうではない。所有のhaveは状態動詞であるが、“I had lunch.”のように「食べる」という意味では動作動詞である。語義によって変わるのである。また、そもそもすべての動詞（あるいはその語義）が動作動詞、状態動詞の何れかにはつきり区別される訳でなく、状態の意味を少し持つ動作動詞や動作性の強い状態動詞などグレーゾーンにあるものが多い。例えば労働の意味のworkなどは動作動詞とされるが、語義によってはかなり強い状態性を持つ。

He works for Hitachi.

この文は「彼は日立で働いている（に勤めている）。」と訳するのが普通であろう。「働く」よりも「働いている」とする方が自然であるのは、その状態性が大いに強調されているからであり、状態動詞あるいは準状態動詞として理解してもよいであろう。進行形でもないのに思わず「～ている」と訳してしまう動詞が状態動詞であるという上の基準は、ここでも有効である。

## 2. 進行形は動作動詞の状態形

動作と状態の関連で考えると、進行形は状態を示す形態である。ある時点における進行中の動作を示すとよく説明されるので、動作の意味であるように誤解されそうであるが、進行中の動作とはすなわち状態のことである。次の文を比べてもらいたい。

When she came home, we had lunch.

When she came home, we were having lunch.

最初のものは「彼女の帰りを待って、(一緒に) 昼食を取った。」とでも意識できるであろう。彼女の帰宅後、みんなで食事するという動作を行ったのである。後の文では、食べる行為がなされることは同じであるが、焦点がその動作そのものではなく、「食事中」という状態に置かれている。彼女が帰宅した時の状況説明をしているのである。このように動作動詞は進行形にすることによって状態の意味を表すことができる。動作を言いたい時にはそのまま単純時制を用い、状態に注目する時には進行形にする。進行形は動作動詞を状態動詞化するのである。

それではそもそも状態を意味する状態動詞はどうなるのか。そのままでは状態を示すので、わざわざ状態形に変換する必要はない。進行形にはしないのである。

このように状態を示すのに二種類の形態が存在するのであるが、その性格は異なる。それを最も明瞭に表すと思われるのが、先に挙げた work などの状態性の高い動作動詞の用例である。

He works for Hitachi.

He is working for Hitachi.

最初のものはその状態性を強調した準状態動詞の文であり、後のものは動作動詞を状態動詞化したものである。どちらも「彼は日立で働いている。」と訳せるが、前者が正社員であることを思わせるのに対し、後者は契約社員かアルバイトであることを想像させる。状態動詞は本来的に状態を示すものであるから、その状態には永続性が暗示されるのに対して、動作動詞をわざわざ状態の意味に変換した進行形にはそうした意味がなく、一時性、非永続性と結びつけられるのであろう。「私は東京に住んでいる。」と言う

時も、仮住まいであつたら “I live in Tokyo.” でなく、“I am living in Tokyo.” が普通である。

### 3. “i'm lovin' it”

ここからは初学者に向かない話となるが、マクドナルドのコマーシャルで毎日 “i'm lovin' it” とやられると、無視する訳にはいかないであろう。普通、進行形を作らないとされる状態動詞の進行形の問題である。

動作動詞の単純時制は動作を意味し、進行形は状態を示す。単純時制にするか進行形にするかは、言いたい内容が動作であるか状態であるかによって決まる。「走る、走った」は単純時制、「走っている、走っていた」は進行形である。状態性の高い動作動詞も、動作を問題にする場合には普通の動作動詞と全く変わらない。「働く、働いた」は単純時制、「働いている、働いていた」は進行形である。しかし状態に注目すると、単純時制で「働いている（勤めている）」という状態動詞に相当する意味を持ち得る。そしてこれを動作動詞の状態形である進行形の「働いている」と並べると、永続的状态と一時的状態の対比がなされることは上に見た通りである。かくて単純時制と進行形の使い分けによって、本来的な動作と状態の区別以外に、状態のあり方の違いも示されるようになるのである。この用法が本家本元の状態動詞にも拡大使用されるようになったと考えられるであろう。

純然たる状態動詞である be 動詞も一時性を強調するときには進行形になる。

You are selfish.

You are being selfish.

最初の文は「君はわがままだ。」と人格攻撃になるが、後の文は「(いつもと違って) 君はわがままだ。」とその時点での態度を非難している。また

進行形は本来的に動作動詞が取る形式であるので、進行形の状態動詞は動作動詞化されていると言ってよい。従って上の文には「君は、今、わざとわがままに振る舞っている。」というように、もともと状態動詞にはない意図も読み取ることができる。

進行形の用法にも色々あるので、表されるのは一時性や意図のみではない。さらに数例挙げてみよう。

The water is tasting different. (水の味がいつもと違う。)

この文は一時性というよりも、いつもと違うという変化を強調しているように思われる。

I'll be loving you forever. (ずっとあなたを愛している。)

一見、一時性と相反するように思われるが、ここでは助動詞willと合わさって意志が強調され、さらにどの瞬間もという強意が加わるのだろう。この強意というのはこれまでの議論から少しずれてくるので、別に説明が必要である。

進行形は目の前で行われている行為を描写する時に用いられるので、単純時制にはない臨場感を持つ。“I cried all night.”と“I was crying all night.”とを比べると、単純時制が単に事実を述べているように感じられるのに対し、進行形には生々しさが感じられないであろうか。その時点に聞き手を引き込むような力がある。この当該の時点に焦点を当て、意味を強める用法も拡大使用されるようであり、問題の“i'm lovin' it”はその例であると思われる。「今、最高。楽しい。おいしい。」などといった感じであろう。

この“i'm lovin' it”も状況が変わると、また違った意味になる。入学して間もない学生に「学校は楽しい？」と質問して、そのような返事が帰っ

てきたとする。まだ期間が短いので最終的な判断はできないが、順調に楽しんでいる。だから進行形を使ったとの解釈も可能であろう。ここでは一時性あるいは非永続性の観点からその選択がなされたと考えられる。このように進行形の持つ様々な特徴の中、どれが強調されるかは文脈によって決定されるのである。

ここで述べたことは、まずは例外として切り捨てるのがよい。動作動詞は単純時制で動作、進行形で状態を示し、状態動詞はいつも単純時制で状態の意味である。この基本が完全に理解できて初めて、例外をも含む進行形の本質が見えてくるのである。

#### 4. 英語の時間とその形式

ここから本題に入る。英語において考えるべき時間は現在、過去、大過去の三つである。未来は現在形のような表現を利用して示されるので、現在の延長と理解した方がよい。時制というよりも、用法の問題である。この三つの時間の中で、特に注意すべきは大過去である。過去より古いから大過去ではない。両者を区別するのは昔を振り返る基準点で、現在から振り返った昔はすべて過去、過去からさらに昔を振り返るのが大過去である。同じ二日前のことで、**「一昨日」**と言うと今日を基準に二日前を指すことが明らかなので過去であるが、**「昨日の話をしてる時に「その前日」**と言うと既に過去である昨日のさらに一日前のことを指すので大過去である。現在から大過去を振り返ることは出来ない。

こうした時間がどのような時制で示されるかを進行形も含めて表にまとめると、以下ようになる。



動作動詞

	現 在	過 去	大過去
動作	現在形	過去形	過去完了形
状態	現在進行形	過去進行形	過去完了進行形

状態動詞

	現 在	過 去	大過去
状態	現在形	過去形	過去完了形

例えば現在の状態を言いたい時は動作動詞なら現在進行形、状態動詞なら現在形を用い、過去の動作を言いたい時には動作動詞の過去形を使う。以下、動詞の時制の違いで意味が大きく変わる例として冒頭で紹介した二組の文を、この表を用いて考えてみたい。

彼が部屋に入ると、もう誰もいなかった（みんな部屋を出てしまっていた）。

彼が部屋に入ると、みんな出て行った。

みんなが出て行った時間に注目すると、前の文ではその動作の行われたのが彼の入室時間（過去）より前であるので大過去である。従って過去完了形を用いる。後の文ではそれが彼の入室後であり、さらなる過去へ遡ることがない。過去の動作なので過去形を使う。

When he entered the room, everyone had gone out.

When he entered the room, everyone went out.

次の例では、最初の文は彼女を見た時点（過去）における状態を言っているので過去進行形が適当であり、後の文は動作を示すので過去形を用いる。

彼女を見た時、別の方を向いていた。

彼女を見たら、そっぽを向かれた。

When I saw her, she was looking the other way.

When I saw her, she looked the other way.

表の有効性が確認できるのではないだろうか。

しかし大過去形の過去完了形には注意すべき点がある。それは、それが誤解を生じない限りにおいて過去形で代用されることが多いということである。

He went out after he (had) finished his homework. (彼は宿題を終えた後、外出した。)

He had gone / went out before he finished his homework. (彼は宿題を終える前に、外出した。)

これとの関連で、注目すべき when の用法がある。因果関係を示す when 節では過去形を用いるのが自然で、二つの別個の行為が行われたことを単に記述する場合には過去完了形が用いられる。先程、「彼が部屋に入ると、みんな出て行った。」を “When he entered the room, everyone went out.” としたが、これは彼が部屋に入ったこととみんなが出て行ったことに因果関係を認めてそうしたのである。もし単に「彼が部屋に入った後で、みんな出て行った」と言おうと思えば “When he had entered the room, everyone went out.” となる。接続詞 when は before や after のように明確に前後関係を示さないため、大過去形を用いてその関係を明らかにする傾向があると考えられる。

## 5. 現在完了形は現在形の一つ

上の表から一つ重要な時制が抜け落ちている。現在完了形である。「～した」と訳す場合が多いので、過去形の仲間のように思われがちであるが、その名が示す通り、現在形の一つであり、焦点はあくまでも現在にある。それがなぜ過去の意味を含むのかはその形式の起源を考えると感覚的に理解しやすい。例えば “I have caught a fish.” はもともと「私は魚を捕まえて持っている」という意味であった。不正確ではあるが、「捕まえた魚を持っている」と考えてもよい。捕まえたのは過去であるが、持っているのは現在である。これが発展して、二つの時間を含む時制が生じたのである。過去形と並べて、意味の違いを考えてみよう。

I lost my key.

I've lost my key.

過去形の文は「鍵をなくした」という事実を伝えているだけであり、今のことは分からない。もう見つかって持っているかもしれないし、まだ見つかっていないかもしれない。現在完了形にすると今、持っていないことが明らかになる。「なくした鍵を持っている」、つまり「鍵をなくして持っていない」のである。

完了（動作）、経験（動作／状態）、継続（状態）の用法の違いが言われるが、過去とのかかわり方の違いを言っているだけである。重要なのは過去と現在のつながりであり、焦点はあくまでも現在にあることを忘れてはいけない。完了、経験では単純時制、継続の意味では進行形が用いられる。勿論、状態動詞は進行形にならない。

これまで述べてきたことは特にイギリス英語の用法に関するもので、アメリカ英語では現在完了形が過去形で代用されることが多い。“I lost my key.” で “I've lost my key.” の意味も示すし、そちらの方が自然なよう

である。しかしアメリカでも用法によっては現在完了形がよく保存されており、現在完了形の理解が重要であることに変わりはない。

## 6. おわりに

これまで学習者の理解を助けることを目的として、英語の時制を出来るだけ単純な形にまとめることを試みてきた。そして伝えたい時間（現在、過去、大過去）と内容（動作、状態）によって、以下のように分類できることを示した。

### 動作動詞

	現在	(現在←過去)	過去	大過去
動作	現在形	(現在完了形)	過去形	過去完了形
状態	現在進行形	(現在完了進行形)	過去進行形	過去完了進行形

### 状態動詞

	現在	(現在←過去)	過去	大過去
状態	現在形	(現在完了形)	過去形	過去完了形

同じ完了形でも、過去完了形が大過去という独立した時間をなしているのに対して、現在完了形が現在の下位区分となっており、一貫性がないとの批判もあるだろう。しかし過去完了形は完了形としてよりも、大過去形として理解した方が便利であり、その方がここでの議論が一貫する。方便であるが、そもそも時制に関する有効な方便を考えることが本稿の目的なのである。

他に未来形の扱いなどでも意見の分かれるところはあるだろうが、筆者なりに、学習者のための時制をまとめてみた。参考となれば幸甚である。

(本学経営学部助教授)